

III 花き

実況（令和元年11月22日現在）

1 キク

奥越地区では、日量数箱の出荷があり、価格は15～55円で幅がある。11月19日の調査では、現在出荷されている11月咲き品種「水車」、「花園」、「あいり」（写真1）は、11月中旬で出荷終了の見込みである。

JAテラル越前キク部会の親株ハウス定植は10月中旬～11月初めに行われた。古株切りは11月中旬から開始され、12月上旬までかかる予定である（11月15日現在）。

あわら平坦地では、秋植えキク用の苗は10月20日までに圃場への定植が完了した。来年度の春植え夏秋キクについては、親株のハウスへの仮植えが始まっている。

病害虫は特に発生していない。

福井市二日市の寒ギク「千福」は雨よけのみのハウスで栽培されている。11月15日の調査（昨年：11月15日）で、草丈70～80 cm、花芽は膜切れから開花直前の段階である（昨年：草丈79 cm、蕾径11 mm）。11月末から出荷予定である。

病害虫は特に発生していない。

二州地区の11月咲露地ギクとして、「花の里」、「金うさぎ」等が栽培されている。11月15日の調査（昨年：11月16日）で、11月15日に収穫が終了した。

秋植えの6、7月咲きキクは、10月下旬から定植（昨年：9月24日）が行われた。

夏秋ギクの親株は10月31日からハウスへの伏せ込みが行われた。

病害虫は特に発生していない。

若狭地区の11月咲電照作型では、11月15日の調査（昨年：11月16日）で、「おちば」は草丈98 cmで立弁（昨年：99.4 cmで立弁）、「白馬」は草丈105 cmで立弁（昨年：104.6 cmで開花期）、「おりづる」は草丈100.2 cmで収穫中（昨年：草丈103.2 cmで立弁）であり、昨年より開花は遅くなっている。11月21日に出荷が終了した。

病害虫として、アブラムシ類が少発生している。

寒ギクでは、11月15日の調査（昨年：11月16日）で、「冬一番」で草丈97.2 cm、蕾径6.1 mm（昨年：草丈94.2 cm、蕾径6.5 mm）、「寒桜」で草丈83.8 cm、蕾径3.7 mm（昨年：草丈90.6 cm、蕾径4.9 mm）、「新年の美」で草丈91 cm、蕾径2.9 mm（昨年：草丈88.8 cm、蕾径5.2 mm）で、



写真1 あいり

生育は昨年よりやや遅めである。

病害虫として、アブラムシ類が少発生している。

11月25日に福井花卉出荷組合の令和元年度栽培講習会並びに出荷反省会が開かれた。

2 スイセン

越前町の露地季咲き栽培の生育は、11月7日の調査（昨年11月6日）で花茎長10.2 cm（昨年：11月6日の調査で9.5 cm）であり、過去7年間平均値と同等であった。花茎本数は1 m²あたりで4.7本であり、過去7年間平均と比べて少なく、遅咲きであった平成24年に次いで少ない本数数であった。花茎長の長さ別分布割合では、3~8 cmの長さが最も多かった。

出荷状況としては、促成栽培では10月21日から（昨年：10月10日から）、露地では11月25日から（昨年：11月10日から）から出荷見込みである。

促成栽培を含めた出荷量は、11月14日時点で8,000本であった（昨年：11月17日現在で2万本）。

3 トルコギキョウ

あわら丘陵地の抑制二度切り作型では、定植が7月下旬から8月上旬に行われ、出荷盛期は10月10日頃、10月いっぱいに出荷は終了した。昨年より10~14日早い出荷となった。

病害虫として、10月に例年よりも雨が多かったため、花卉に灰かび病が少発生している。

越前市では、11月15日の調査（昨年：11月15日）で、9月中旬に播種された品種は、11月14日に定植が終了した。

病害虫は特に発生していない。

5 ストック

あわら丘陵地では、夏播き秋冬どりの作型のうち直播栽培では、8月下旬から9月上旬に最も播種された。8月17日に播種し、ビビフルFを処理した品種・個体では、10%以下の発蕾率になっている。9月は花芽分化に必要な低温（15℃以下）になった日が少なく、本格出荷は11月下旬からの見込み。昨年度より10日程度遅れている。その結果、年越しのものも多くなる予想である。極早生のアーリーアイアン系品種でもまだ発蕾しておらず、従来のアイアン系（中生）との比較は困難である。



写真2 アイアンホワイト
(あわら市・8月20日直播)

病害虫として、菌核病、立枯病が部分的に少発生、コナガが少発生している。

福井市では、11月18日の調査で、9月上旬定植のアーリーアイアン系の品種の開花が始まっている。

病害虫として、アブラムシ類は少発生している。

越前市では、カルテットシリーズが8月20日から9月10日頃にかけて直播された。11月15日の調査（昨年：11月15日）では、8月20日頃播種の品種・個体で草丈55 cmでピンチ作業が終了（昨年：63 cmで収穫前期）、8月末播種の品種・個体で草丈55 cm、蕾径8 mmでピンチ作業中（昨年：草丈55 cmで蕾径9 mm、ピンチ作業中）であった。9月10日頃播種の品種・個体では草丈27 cmで未発蕾（昨年：草丈27 cmで、未発蕾）であった。

病害虫は特に発生していない。

二州地区では、年内出しの作型で、8月中旬に播種された品種、個体では草丈20~40 cm、展開葉数は32~36枚、一部で発蕾が確認された。9月上旬に播種された品種・個体では草丈15 cm、展開葉数は20枚であった（11月15日調査）。

病害虫は特に発生していない。

若狭地区では、11月15日の調査（昨年：11月19日）で、9月上旬に直播された品種・個体では草丈が30~36 cm（昨年：35~45 cm）、10月中旬に直播された品種・個体では、本葉3対（昨年：3対）展葉になっている。

病害虫は特に確認されていない。

6 ハボタン

福井市二日市では、11月18日の調査（昨年：11月15日）でハウス栽培の「晴姿」「初紅」で、草丈60~80 cm（昨年：「晴姿」で39 cm）で、灌水の多少による草丈の長短が目立っている。温暖な気候のため、着色はやや淡い。

病害虫は特に発生していない。

7 オータムヴィオレ

無シェード季咲栽培では、10月25日から出荷は始まった。

病害虫は特に発生していない。

対策

1 ハウスの雪害防止

冬期間利用しないハウスは、栽培終了後できるだけ早く被覆資材を除去する。

冬期間利用するハウスは、降雪前に雪害防止対策を十分整えておく。大雪警報・注意情報等が発令された場合には、直ちに対応し被害防止に努める。

(1) ハウスの補強

積雪によるハウス倒壊を防止するため、丸太や竹等をハウス内に持ちこみ準備しておき、降雪が予想される場合は、3~4m間隔で支柱を立てハウスを補強する（写真3）。

また、積雪荷重により肩部が左右に広がると倒壊しやすくなるので、ワイヤー等で引き付けておく。ワイヤー間隔が約6m以上になると、ワイヤー間中央部ではその効果がほとんどなくなるので、支柱と同等の間隔で、支柱の間に張ることが望ましい。



写真3 ハウス内の支柱の設置

(2) 屋根雪の滑落促進

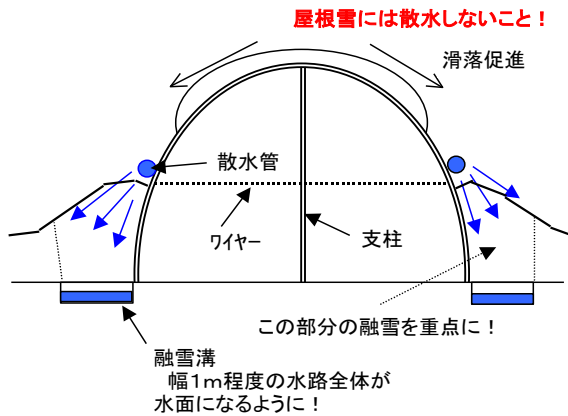
屋根雪はハウス内温度を4℃以上にすると、ほとんどの場合滑落するため、加温機やストーブによる加温を積極的に行う。また、内張りカーテンがある場合は、カーテンを開放し天井まで暖かい空気が行き渡るようにする。

滑落しない場合は、手作業で強制的に滑落させ、屋根に雪を乗せたままにしない。特に、積雪による被覆資材のゆるみが直管パイプに引っかかって屋根雪の滑落を阻害するので、積雪が多くならないうちに人力で除雪しておく。特に、天窗は積雪しやすいので注意する。

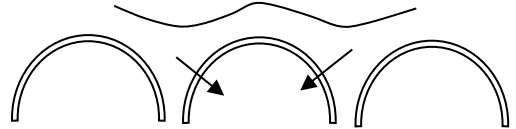
(3) ハウス周囲の除雪（写真4）

滑落した雪がハウスのサイド部に積もった場合は、早期の除雪と散水による融雪を行う。屋根部まで積雪してから除雪する場合は、ハウス両側を均等に除雪するようにし、片荷重によるハウスの倒壊を防ぐ。

除雪機を用いる場合は、ハウス周囲を整理して除雪機の通路を確保しておく。効率的に除雪を行うには、いずれも積雪が多くなる前から稼動することが重要である。



ハウスの隣接間隔が狭い場合は、1棟おきに休作して被覆材を除去し、雪の捨て場を確保する。



ハウスを覆うぐらいの積雪があった場合、肩部から除雪を始める。

写真4 ハウスの雪害対策と除雪

(4) 被覆資材を除去してあるパイプハウス

被覆資材を除去してあるパイプハウスでは、パイプ交点等に積もった雪が着雪し屋根一面に積雪するので、時々人力で雪を落としておく。また、ハウス肩部や腰部のパイプ等が積雪に埋没したままにしておくと、沈降圧によって変形、破損等の原因になるので、早めに掘り出しておく。

2 8、9月咲きギクの親株管理

(1) 親株の病害虫防除の徹底

1週間に1回の予防剤散布を励行する。苗床での防除は面積が小さいため、薬量を少なくして回数を多くする等、効率的に防除する。ただし、草丈が低い分、葉裏にかかりにくいので、丁寧に葉裏にかける。さび病等の病斑が隠れている場合があるのでよく確認する(写真5)。黒さび病には、ステンレス等で防除する。



写真5 黒さび病と白さび病
親株の葉裏にみられる

(2) 越冬親株が過湿になると、株枯れや病害が多くなるので排水に留意し、過湿にならないよう管理する。

(3) 親株の切除は12月中旬までに済ませ、冬至芽の摘心は1月下旬に地際部より2~3cm(葉3、4枚)を残して行い、折り取った茎葉は速やかにハウスの外に出す。特に防除前はハウス内の雑草を除去し、ダニ類、アザミウマ類等の隠れ場所をなくすようにする。

(4) 12月の親株切除後は、ただちに白さび病や各種病害虫に対する防除を実施する。特にダニ類やアザミウマ類はいったん生長点部分に入ると防除しにくいので、丁寧な散布を実施する。近年、紋々病(キクモンサビダニ)が見られるので、よく注意する。

3 スイセンの管理

(1) 灌排水管理(ハウス温度管理)

圃場に停滞水がある場合は排水対策を実施する。ハウス栽培で土壌水分が少ない場合は、灌水を行い、適切な水管理を行う。ハウスにあるスイセンでは日中は15℃程度になるように管理する。

(2) 収穫

花一輪2分咲きで適期収穫する。収穫後はすぐに水揚げを行い、しおれを防止する。

(3) ネットハウスは雪が付着するので、早めの雪対策を行う。

中柱として、パイプや孟宗竹、丈夫な垂木を3~4mおきに設置し、ジャッキなどで突っ張り、補強管理を行う。上部はハウスと連結すると良い。積雪荷重によって肩部が広がると倒壊しやすくなるため、ワイヤーなどでハウスの肩を引き付ける。筋交いは建設時に設置し、降雪前に補強しておく。

4 トルコギキョウの育苗管理（3～4月定植もの）

- (1) 近年は稚苗定植から大苗定植に移りつつあるため、育苗期間を長めに設定し、苗を12℃以下の寒さにあてないように管理する。5℃以下の寒さに長期間当たると生長点が弱り、側枝が増加することがある。その場合、セルトレイは200～288 穴で深めのものを使用する。子葉展開後は灌水代わりに1週間間隔で液肥を施用するが、表土の一部にでも青ゴケ等がみられたら施さない。寒波が来た時も同様である。
- (2) 10℃で5週間程度種子冷蔵を行うことで、発芽勢がよくなり、開花が促進される品種が多いので、早生品種をまく場合は冷蔵処理を前もって行う。
- (3) 好光性種子であるため覆土はせず、底面吸水かミスト灌水を行う。ペレット種子を用いる場合は、ペレット資材を種子から取り除く必要があるため、軽く力を入れてペレットの被膜を割りながら播く。発芽後は底面灌水をやめ、細かいジョウロ等で頭上灌水する。また、灌水の水は地温の低下を防ぐため、溜め水したものを使う。
- (4) 育苗温度は昼温20～25℃、夜温15～18℃として、夜間はトンネル等で保温する。場合によってはトンネル上に毛布やコモで保温する。

5 ストックの栽培管理

- (1) 気温が下がってくると施設を閉め切りにすることが多くなり、多湿となりやすい。その結果、軟弱徒長となり、灰色かび病や菌核病といった病害が発生しやすくなる。厳寒期でも日中、晴れた日にはこまめな換気を行い、病害が起りにくい環境づくりに努める。
晴天が続かず、発生が懸念される場合は、早朝換気を行い、低温低湿度の空気を施設内に導入し、昼間昇温時の湿度を下げる工夫を行う。
- (2) 灰色かび病や菌核病に対する治療剤は花き類やストックでは水和剤が多く、生育後期は葉斑による汚れが問題となるため、生育前半までにポリベリン水和剤（1000倍）などで防除に努め、生育後半は汚れが目立ちにくいフロアブル剤を使用する（例：アフェットフロアブル 2000倍など）。

AMeDAS のデータ

